



あなたにぴったりの湿地は

サロベツ原野



こんなところ ↓

サロベツ原野（サロベツ湿原）



嶋崎 暁啓（認定NPO法人 サロベツ・エコ・ネットワーク）



空から見たサロベツ湿原
中央に瞳沼、左奥がパンケ沼、さらに奥がパンケ沼
右側にはサロベツ川と海岸砂丘林、日本海が見える

地平線まで広がる日本最大の^{こうそうしつげん}高層湿原

サロベツ湿原は、北海道のほぼ^{せんたん}先端、日本海側の^{とよとみ}豊富町・^{ほろのべ}幌延町にまたがる日本で3番目に広い湿原である。その面積は6,700 ha。東京ドーム約1,400個分、山手線の内側よりも広い大湿原。また、サロベツ湿原の特徴は、「^{とくちよう}高層湿原」と呼ばれる極めて発達した湿原が大面積で広がっており、その広さは日本最大規模を誇っている。季節の花々で^{いろど}彩られる湿原と、地平線の^{かなた}彼方にそびえ

立つように見える^{りしり}利尻山（実際には日本海を^{はさ}挟んだ利尻島の姿）を望む雄大な景色は素晴らしく、利尻島・^{れぶん}礼文島と共に1974年に日本最北の国立公園「利尻礼文サロベツ国立公園」に指定されている。湿原では、春から秋にかけて数百種類の花が次々と^さ咲き^{ほこ}誇るが、高層湿原では目立つ大きな花よりも、足元にひっそりと咲く小さい花が多いので、立ち止まってじっくり探してみたい。



湿原で6月下旬に見頃を迎えるエゾカンゾウ（ゼンティカ）
近年は遅霜の影響やエゾシカの食害を受けている



オオヒシクイは春にも飛来するが、春は秋に比べると多くないため、秋の使者という印象
数千羽の群れの姿は圧巻

野鳥たちの楽園

サロベツは、多くの野鳥にとって重要な^{ちゅうけいち}中継地、^{はんしよくち}繁殖地であることから、2005 年に「ラムサール条約」に登録された。初夏にはノビタキ、ノゴマ、ツメナガセキレイなど草原性の鳥が子育てのために飛来し、今では国内でサロベツのみで繁殖が確認されている絶滅危惧種^{ぜつめつきぐ}のシマアオジ(→p.27)の姿もある。また、草原のタカ、チュウヒもサロベツが国内最大の繁殖地となっている。毎年、春と秋にはオオヒシクイやコハクチョウ(→p.26)などが渡りの途中^{とちゅう}で飛来し、長旅の疲れ^{いや}を癒す姿が見られる。特にオオヒシクイは秋に 8,000 羽以上飛来する年もあり、国内最大の中継地になっている。2000 年代に入ってからタンチョウ(→p.22)の繁殖も確認され、冬になるとオオワシ、オジロワシ(→p.31)などの海ワシたちが数多く飛来する地域でもある。



ツメナガセキレイは、国内では北海道宗谷管内の一部でしか繁殖が確認されていない宗谷を代表する鳥の一つ



木道を散策すると、どこまでも続く広い湿原と青い空に心が開放される
可憐な花々や野鳥たちの姿も楽しめる

サロベツ湿原センターと自然再生

サロベツ湿原センターは、利尻礼文サロベツ国立公園^{げんかんぐち}の玄関口、豊富町に 2011 年にオープンした環境省^{かんきょう}の案内施設^{しせつ}。天井が高く、明るく開放的な館内には、サロベツ湿原の自然やそこに生息^{はくせい}する動物、植物などについて、パネルや剥製、映像などで分かりやすく紹介^{しょうかい}されている。湿原内を散策できる一周 1 km の木道を歩くと、雄大なサロベツの自然を全身で感じられる。車椅子でも利用可能なバリアフリー木道からは季節の花々や野鳥たちを間近に観察できる。農地開拓^{かいたく}により、サロベツ湿原では乾燥化が進んだため、湿原の保全・再生を図り、自然の共存^{くわん}する酪農・地域づくりを進めるための「自然再生事業」が行われており、自然再生の現場を見学するツアーも開催されている。観光客の多い夏だけでなく、秋の草紅葉^{くさもみじ}の時期や、冬の大雪原、春の芽吹き^{めぶ}の季節まで一年を通して、サロベツ湿原の魅力^{みりよく}を発信し、NPOやパークボランティアなど地域の保全活動^{きょてん}の拠点となっている施設である。



サロベツ湿原センターでは、最新の花の状況から湿原の成り立ち、泥炭採掘の歴史や地域の産業まで幅広く紹介している

